

〔書評〕 最初に最後の「国民歴史作家」 その栄光と哀愁

―福間良明『司馬遼太郎の時代 歴史と大衆教養主義』―

戸松幸一

一 みんな知ってる小説家

「誰でも知ってる有名人」というのがこの世にはいる。現実に一〇〇パーセントの人々に知られているわけではない。知らなければ常識を疑われるという意味である。世代や社会層を問わず、程度の差はあれ日本国内ならどこに行っても通用する常識。「国民的〇〇」と呼ばれるには、少なくともそのレベルで有名な必要がある（もちろん十分条件ではないが）。芸能人やスポーツ選手、政治家などに多いが、作家にも何人かいて、歴史小説の分野では司馬遼太郎が間違いなくその一人だろう。

福間良明『司馬遼太郎の時代 歴史と大衆教養主義』（中公新書、二〇二二）は、司馬遼太郎のバイオグラフィを縦糸に、司馬が「国民作家」たりえた社会の背景とを横糸にした歴史社会学的研究である。冷徹な分析に底流する、教養に憧れるノンエリートたちへの温かな視線と、実利には必ずしも結びつかない大衆化した「教養」に積極的な価値を見出そうとする姿勢はこれまででの研究から一貫しており、読後にしみじみとした余韻を残す。

序章に著者の問題関心にもとづく論点がまとめられている。①「余談」と没落後の教養主義、②サラリーマンの「教養」、③メディアの機能と相互作用、④「傍系」

「二流」の軌跡、⑤戦中派の情念、⑥「司馬史観」をめぐって、の六点である。

それぞれの論点を切り口に考究を深めつつ、ときに複数の論点を絡め合わせながら、著者は巧みに「司馬遼太郎」という作家とその時代を織り上げていく。

二 「傍流」の弱みと強み

「旧制高校ではなく大阪外国語学校という旧制専門学校（官立）に進み、また復員後に零細・中堅新聞社を渡り歩いた」（p15）司馬遼太郎（本名、福田定一）は、「正統」なるものを志向しつつ、その本流に至ることはなかった。傍流——これは本書が司馬の生涯と作品およびそれが生み出した社会現象までを貫くキーワードである。

よくできる歴史の学徒ならふつうは大学教員になるだろうし、小説家の花形は日本においては私小説的な「純文学」を書くだろう。ジャーナリストなら大手新

聞社の記者から出世街道を駆け上がるのが王道である。しかし司馬はそうした本流に入るチャンスを見逃した。

このことは「優等生的なものへの燻ぶった違和感と、司馬に植え付けることとなった。」（p240）

しかしビジネスチャンスは、しばしばこのようなニッチの谷間に落ち込んだ者に訪れる。当時の歴史学会の保守本流とは違う歴史観で「余談」に満たされた小説らしくない小説を書く。このことで司馬は「国民作家」のスターダムにのし上がった。

「国民」の大多数は凡人である。「非優等生」だからこそ、居酒屋で上司の悪口を言う会社員の気持ちや、あるいは戦場で将官のやり方に鬱憤を募らせる下士官や兵卒の感覚を理解できる。凡人がしばしば思い描く理想の職業像——会社や上司に認められなくとも、いや認められないからこそ、ひたむきな努力で職人的な成果を積み重ねようとすると、組織にありながら個人に閉じた禁欲的な価値観——に共鳴できる。

終戦後司馬がたまたま零細新聞社で同僚となった老

記者にまつわるエピソード(『名言隨筆サラリーマン』)が、この心情を端的に示している。「敗戦後、職探しをして強引に就職した零細新聞社『新世界新聞』にいた、ベテランだが出世とは無縁な「人生の敗残者」松吉淳之介は、「昔の剣術使」のように「記事を書く技術のみを突き詰める人物」だった。

夜の編集局の片隅で焼酎を酌み交わし、「社によって守られている身分や生活権のヌルマ湯に体を浸すな、いつも勝負の精神を忘れず、社というものは自分の才能を表現するための陣借りの場だと思え」という職業規範を汲み取った。(p364)

こうした人物が出世と無縁なのは、人としての器が小さく、自分の仕事のことしか考えられていないからだ。このように批判することができらるだろう。または栄達の道を絶たれた者が、職業規範をかたくなに信じていることで潜在的に自らの沈淪を慰めているともとれる。

しかし同時に、このように考えることもできる。松吉のような人物がもし今とは違う時代に生まれていれば、新しい世を創る強い原動力となったかもしれない、彼は生まれた時代を間違えたのだ、と。

引用文中の松吉淳之介が「昔の剣術使」に喩えられるように、素浪人からのし上がる剣豪がそうだった。近代国家を作り上げる下級武士もそうだった。

あまり仕事をがんばっているように見えない人でも、いや、それどころか「え、おまえが？」と思うような残念な仕事ぶりの人でも、いや、えてしてそういう人であればあるほど、酒が深くなると松吉のような「職業規範」を語り出すものである。かくいう私も誰か他人に「え、おまえが？」と思われている可能性が高い。それが凡人というものであり、繰り返すが「国民」の大多数は凡人である。

多くの人が胸の内にはまっている、ストイックではあるけれど独りよがりな職業倫理。これに寄り添い、共鳴し、「違う時代なら、こんな僕でも私でも」と思え

るような物語を世に送りつづけた。今日の「なろう系」のようにいきなり転生したりはしないが、現世の憂さを忘れて歴史の大人物に感情移入するヴァーチャルな経験を提供した。これこそが司馬遼太郎（この人自身はあらゆる意味で凡人ではないけれど）が「国民作家」たりえた最も大きな要因なのではないだろうか。

三 「教養主義」の冷却と再燃

司馬遼太郎の作品が広く受け入れられた社会的な素地を説明するにあたり、著者は「教養主義の没落」とそれに続く「大衆教養主義」の流行、およびそれを支えた世代の高齢化によって発生した「歴史ブーム」にいたるプロセスを描き出す。

旧制高校という文字通りオールドスクールな教養主義規範（学識＝権力のイデオロギー）の生成の場が失われ、格式高い威儀はトリクルダウンした。しかしそれは単に消費されるばかりのファッションではなく、

社会的上昇を学問に幻視した田舎の若者たちにとって、少なくともそれは深遠なる「道」だった。当時の彼らにはそう見えていた。

一九五〇年代、田舎の若者の「自分より勉強ができないあいつが高校に行けて、なぜ自分が進学できないんだ」という屈折 (pivot) が「実利を超越した教養」への憧れを醸成する。農民出身の新選組が現実の武士以上に「武士であること」を究めんとしたように、大衆化した教養主義はオリジナル以上に求道的な性格を帯びる。滑稽でありながら切実な、それは幻滅のなかに見る白昼夢であり、希望の衣をまとった諦観である。

社会的に一言でいえば立身出世にかける野心の「冷却効果」の一プロセスだが、本書の面白さはこの熱が実は完全に冷え切ってはならず、十余年の埋火の時を経て、やがてオジサンオバサンの「大衆歴史ブーム」として再燃した「その後」を描いたことである。その真ん中には戦前の「正統」教養主義盛んなりし時代に「傍系」知識青年として青春を過ごした司馬遼太

郎がいる。

かつて政治権力と分かちがたく結びついていたスキルが、時代の流れとともにそのつながりを絶たれると、その礼儀作法が自己目的化して高度に洗練され複雑で倫理的な「道」となる。剣道、柔道、書道、茶道、華道、修験道。日本の伝統文化の多くはこのようにして作り上げられてきたフシがある。それぞれの「道」は既得権益を持ち、それゆえに権力や財界と全く繋がりが無いわけでもない。だから内実は見かけほどクリーンではないが、いったん「道」となった技芸は原則としてあらゆる人に開かれ、そのかわりに究めることはとてつもなく難しい。

教養主義が「道」になりきれなかったのは、その中核となる明確な権威の源泉が存在しないからだろう。段位もなければ家元もおらず、秘儀とかもない。しいて言えば教養そのものが権威だが、じつはその中身は空洞で、モードのように移ろうのが本質である。その容れ物である本はどんどん安売りがされて文庫となり、

読もうと思えばだれでもいつでも読める。権威の輪郭が見えにくいからこそ、読書量でマウントを取り合う空虚な「象徴的暴力」の場にもなりやすい。

教養の大衆化にはテレビも一役買っている。司馬遼太郎の作品は凋落し聴衆を特化させつつあった映画よりも、広い層をターゲットとした無難な表現を好むテレビに向いていた。ある世代にとって司馬遼太郎といえば大河ドラマの原作者である。「教養」の中身を乗せる媒体は、紙に印刷された活字からブラウン管へ流れ出た。視覚イメージによる「テレビ的教養」(佐藤卓己)の世界に活字オールドメディアの国からやって来た宣教師の役割こそ、「傍流」出身の歴史作家の真骨頂というべきだろうか。

四 ビジネス書としての歴史小説

私の読んだことのある司馬作品は、長編では『坂の上の雲』のみで、あとは短編集が数冊である。

『坂の上の雲』はかなり好きなほうの小説である。「余談」とは書かれていないが、四巻にある下瀬火薬についての解説が個人的に印象深い。

技術的に徹甲弾を作り出せなかった当時の日本が、その代替として開発した「下瀬火薬」。敵戦艦の装甲を貫けないかわりに艦上を焼き尽くすという恐ろしい武器の製造を可能にした特殊な火薬だが、これを発明したのが広島藩の鉄砲方を父にもつ下瀬雅允である。工学士エリートであるとはいえず下級武士のスピリットを胸に秘めた一技師の創意が近代戦の戦況をひっくりかえす。テレビ番組「トップランナー」を思わせる、ひたむきな組織人の努力が実を結ぶサクセスストーリーである。

著者は司馬作品における軍隊の描写と現代の会社組織について、このように述べる。

司馬作品には、企業組織を思わせる場面も少なくない。そのことも、経済の中心が第一次産業から第

二次・第三次産業に移行しつつあった日本社会を投影していた。(p142)

壮年化した大衆教養主義＝歴史ブームはサラリーマンの教養主義でもあった。

このころ、会社は「社員」「工員」のような職別の採用区別を設けなくなり、それに産業構造の変化もあって、サラリーマンという社会層したいが拡大していた。それにともない部署を超えた配置換えが容認されるようになると、彼らには専門性よりも「柔軟性」が求められるようになる(p180-181)。下瀬雅允のような専門職エンジニアからさらに一歩進んだ、ゼネラリスト会社員としてのキャリアである。

「人のやらないことをやるのだから苦勞するのは当たり前」(p183)。ストレスを飲み込んで会社のために尽くす男の背中には「サラリーマンの行動律」が広く求められる。

軍隊は規律の取れた巨大な官僚組織であり、基本的

な構造は一般企業とよく似ている。戦闘に勝つという明確な目的のため合理性を追究する姿勢から、会社組織の見習うべき点が多いと見なされる。有名な「ランチェスター経営戦略」は軍事目的の数理法則の応用だし、実際、会社組織を軍隊や自衛隊に見立てたビジネス書はネットで「ビジネス 軍隊」、「経営書 自衛隊」などと検索すると十指に余る書名がヒットする。司馬作品は今日の書店で入口付近の平積みコーナーを占める、サラリーマン向けビジネス書の先駆けの一翼でもあったのだろう。

五 痛快なるリーダー論

ところでビジネス書というのは本来、経営を成功させたり、営業成績を向上させたりするための指南書である。しかし一方で中間管理職が部下と接するコツとか、同じ部署にいる困ったスタッフとどう関わるかといった、人間関係にまつわるテーマを扱ったものも少

なくない。下から上にアングルを移すとそれは「リーダー論」である。

『坂の上の雲』の秋山兄弟や『花神』の大村益次郎、『竜馬が行く』の坂本竜馬などは、組織上層部の意向にときには逆らい、自らの技術を生かして最終的な勝利を得る (p.18)。ゼネラリスト社員としてはあるまじき行為だが、これはしがらみの多い会社生活をめぐる「ガス抜き」を促すものである (p.187)。洋の東西を問わず、今日の映画やテレビドラマなどでもよく見る展開である。現実には難しいからこそ、物語の痛快さがいや増すのである。

司馬は戦中、戦軍兵として兵役を経験し、軍上層部の技術軽視や精神論の横行を生み出す軍部の「組織病理」を目の当たりにする。そこで感じた「軍部への憤り」が、「そのまま会社組織への批判に」つながった。著者はそこに「サラリーマン教養として受け入れられる素地」を見る。

『坂の上の雲』のなかで、日露戦争において旅順攻

略軍を率いた乃木希典中将の評価が（不当に？）低いことはよく知られていて、私も読後の記憶に残っている。小説内の乃木評の一節を引いてみよう。

有能無能は人間の全人的な価値評価の基準にはならないにせよ、高級軍人のばあいは有能であることが絶対の条件であるべきであった。かれらはその作戦能力において国家と民族の安危を背負っており、現実の戦闘においては無能であるがためにその麾下の兵士たちをすさまじい惨禍へ追い込むことになるのである。(三)

「高級軍人」を「社長」または「部長」に、「作戦」を「経営」に、「国家と民族」を「会社」に、「麾下の兵士」を「社員」に置き換えると、そのまま経営リダー論の一節……というか、会社員が居酒屋で展開する上役についての愚痴になる。

軍隊という組織が形式主義におちいり、「勝つという

目的」から逸脱しはじめる。どうでもよい手続きに神経を使い、人事システムも機能不全に陥る (p.109)。忘れ去られているのは「無償の功名心」(p.87)の大切さである。軍隊や企業に限らず、大きくなった組織が必ずといってよいほど直面する課題だろう。

経営者視線で大局を睥睨し戦略を語りつつ、等身大の対人ストレスのはけ口ともなる。これらは「ビジネス」書の売れ行きに必要な要素なのかもしれない。

六 「歴史小説」vs「歴史の物語」

一九九〇年代、二つの出来事がおきる。一つは司馬遼太郎の死去。もう一つは「日本人の誇り」を喚起しようとする「自由主義史観」の一派が「司馬史観」を利用しはじめたことである。

『坂の上の雲』が好きだと書いたが、あまりこれを公言すると眉をひそめる人もいる。そういう人の多くは司馬作品を熟読し独自にその評価を下しているわけ

ではなく、この頃の印象で「司馬作品＝ウヨク」の等式が出来上がっている人だろう。じつさいに読んでみると、司馬の歴史観が全然右翼的ではないことは、本書が確認しているとおりである。

「傍流」の生き方を通してきた司馬は、その作品も小説らしくない小説、歴史書とは言えない歴史というもので、歴史研究者からも文学評論家からも「論評しづらいものであった」(p208)。しかし自由主義史観を標榜する者が作品を取り上げることで「司馬史観」は論壇にとりあげられ、皮肉にも「二流(＝批評に値するもの)」にランクアップする。

とはいえ司馬遼太郎は山崎正和、高坂正堯、橋川文三といった「時代の知をリードする学識者」と対談するなど、それ以前から一級の知識人との交流があった。司馬の「余談」は「ビジネスマン層のみならず、一部の知識人に受け入れられていた(p214)」。

藤岡信勝など自由主義史観の論者による「司馬史観」の称揚は、昭和の軍国主義に対する批判を無視した「司

馬作品への明らかな「誤読」にもとづいていた」(p225)。しかしその勢いで『坂の上の雲』などに顕著に見取れる「明るい明治、暗い昭和」という対照的な描き方に対しても批判があがる(p230)。

これは確かにその通りだと私も思う。だがたとえば丸山真男(1914-1996)が陸羯南の思想を明治期の「健康なナシヨナリズム」と評するとき^④、これは当然、昭和期の「不健康なウルトラナシヨナリズム」を前提としている。つまり「健康な明治、不健康な昭和」。このように当時のアカデミズムの中心からもよく似た時代認識が表明されていることを考えると、司馬遼太郎(1923-1996)の諸作品に散見する「明るい明治・暗い昭和」は、「短い二〇世紀(E. ホブズボウム)」を生きたいわゆる戦中派の抱く、かなり普遍的な感覚だったのではないかとも思える。

もちろんこうした雑駁な印象論は後の世代に批判され修正を加えられて然るべきである。今日の私たちの多くが「明るいバブル期・暗いロスジェネ」と受け止

めているのに近いかもしれない。この感覚も後の世代によって修正されることだろう。

七 「人文知」のゆぐえ

複数の角度から光を当て「司馬遼太郎の時代」を紡ぎあげた本書は、文学論でありながら社会論であり、歴史社会学の視座に立った人物史である。丸みを帯びたブラウン管が映し出す色あせた市街地に吸い込まれるような郷愁を抱くのは、対象が司馬遼太郎という、テレビ文化の勃興期に一時代を築いた作家の生涯を辿るものだからだろう。

「司馬遼太郎の時代」とはいかなる時代だったのか。今日の私たちはこれをどう評価できるのか。司馬作品の「読者への過剰な「サービス」を問題視する批判（中村政則）」に対して、著者は、こう述べる。

の動向に左右されるべきものではない。だが、その一方で、アカデミズムの実践と読者大衆への架橋について思考を巡らせることも、重要ではないだろうか。(p252)

司馬遼太郎の時代。それは世代限定的であるとはいえず、一般の「大衆」がアカデミズムの「人文知」に価値を見出し、これに親しんだ時代と重なる。司馬遼太郎は、作品を通じてその「架け橋」の役割を担ったと、著者は見る。

人文知が大衆から切り離され、孤高の存在になっ
てしまうことは、望ましいことではない。大衆迎合
しない屹立した姿勢が学問には求められる一方で、
知と大衆が有機的に触れあう営みもまた重要である。
(p253)

史実の検討から編み出される知見は、決して大衆

ここに著者の、今日の社会に対する根源的な問題意

識が現れている。「教養主義の大衆化」というと、どうしても俗悪な印象がつきまとう。しかしよく見ると、そう悪くない面も多い。実利や権力への志向が全くないわけではないけれど、それでも「傍流」大衆教養主義には細いながらも清らかな水が流れている。これはこれでいいものだし、歴史や文学が学術研究者に閉じていては先細りになるばかりだ。

研究者として、また教育者として発した著者の問いかけは、人がそれぞれ「自分史」を持ち、その道のりを一個の歴史物語として理解する「近代的自我」の今後のありようを問うものでもあるだろう。

八 拡散する「司馬遼太郎」的なもの

新海誠のアニメ映画に古びた神社や高校の国語教師がやたらと登場するように、「人文知」はSF的なガジェットと同様、じゅうぶんな訴求力を持っている。しかしそれは客体として消費されるコンテンツとしてで

あって、著者の言う「開かれた人文知」とは別のものだろう。もつと主体的に「社会や文化、政治を構想する」ヒントや方法となりうるものが、人々の思考の根幹に宿り生きること。ファクションとして一時的に消費されるのではなく、より普遍的に日常生活や生産活動に関わること。

司馬遼太郎のような「国民歴史小説家」は、たぶんもう現れない。本著が指摘するように、それは一人の作家の生涯であると同時に固有名詞としての一つの時代だからである。

司馬の小説を読んでいるのは今やおじいさんおばあさんが大半かも知れない。しかし「司馬遼太郎的なもの」へのニーズは、現代の日本社会からほんとうに消失してしまったのだろうか。おもしろ歴史活劇はケレン味を増して『キングダム』などの少年・青年マンガが、右派（＝反左翼）好みのイデオロギー物語は百田尚樹をはじめとするネットウヨ御用達のクリエーターが、鬱屈したサラリーマンの気宇壮大なリーダー論・組織

論はビジネス書が、思わず友だちに教えてあげたくなるアカデミックな「余談」の蘊蓄は各社の新書が、それぞれ需要を引き受けてぼちぼち元気な市場を形成しているように、私には思える。

現実には教養ある人というのは今も昔も少数だが、これを自称する人もほとんどいない。いたとしたら胡散臭いし、深い教養を身に着けた人よりも早口で揚げ足取りの上手い軽薄なヤツのほうが口喧嘩は強い。絶対的な基準がないので「私は教養がある」とは言いにくいけれど、「あいつは教養がない（＝私はあいつよりは教養がある）」というように、他者との相対的な判定しかできない。だから「教養人 a learned person」は大抵、限りなく尊称に近い他称となる。

したがって「教養主義」の規範を共有する主体は、教養人ではなく学ぶ人々 learning people である。ゆえに「教養」としての学識が結果として少数のエリートのものであったとしても、「教養主義」はいつの時代も大なり小なりその意義を認める「大衆」の存在を前提とし

ている。それに教養主義はもともと出版産業および教育産業と結びついた消費文化の側面がある。

そうであるなら、サラリーマン教養主義が「歴史ブーム」の形をとったように、今後の「人文知」と社会の関わりは、不易の「道」を志向するよりも、いつそのこと移ろいやすい流行の連続と、一度割り切つて考えてみてもいいかもしれない。いっちょ仕掛けてやろう、「教養」の新しいムーブメントを生み出そう——これくらいの軽い気持ちで取り組むのも、アリなのではないか。

著者の問題関心に共感しつつ、今後の社会における「教養主義」の行方に心を配りたい。

① 本書評の括弧内のページ数は、特に断りがない場合は福間良明「司馬遼太郎の時代 歴史と大衆教養主義」中央公論新社、二〇二二のものである。なお読みやすさを重視し一部ページ数の表記を省略している。

② 竹内洋「『教養主義』の没落―変わりゆくエリート学生文化」中央公論新社、二〇〇三

③ 『坂の上の雲（四）』文芸春秋、一九九九（小説本文 p.188）

④ 丸山眞男「陸羯南 人と思想」中央公論社（96）、一九四七